

2019年10月27日(日)／説教者：國分美生

説教：「愛し合い、仕え合う」

聖書：ヨハネによる福音書13:1～20

ヨハネ福音書によりますと、イエスはご自身の最後の時が近づいているのを知っていました。ここまでイエスと共に歩んできた弟子たちがご自分の元から逃げ去っていき、不安で、心を騒がせるであろうことも、イエスは知っておられたのだとも描いています。そのような状況の中で、イエスは弟子たちの足を洗います。古代のユダヤ社会では主人の足を洗うのは、奴隷の仕事でした。足を洗うという仕事がそれほどに、社会の最底辺の者がする仕事と理解されていたのであれば、ペトロが「わたしの足を洗うなどということは決してなさらなでください」と抵抗した意味もよく分かります。イエスは栄光に輝くイスラエルの王として、讚美をもってエルサレムに迎え入れられました。弟子たちもそのようなイメージと期待をイエスに抱いていたのでしょう。

イエスは象徴行為として弟子たちの足を洗いました。師であり、主である私があなた方の足を洗ったのだから、あなた方も互いの足を洗いあわなければならない、とイエスはいわれるのです。ヨハネ福音書全体を貫いているキーワードの一つは、13章の34節以下にあります。「新しい命令をあなた方にあたえる。あなた方も互いに愛し合うように…」そして互いに身を低くして、愛し合い、仕え合う姿がこの世に対しての証となる、とヨハネはいうのです。イエスの姿からわかるように、神は上から力で私たちを押さえつけコントロールするのではなく、私たちよりもなお低いところから、わたしたちを愛し、奉仕し続けてくださる、そのような存在なのです。

愛し合い、仕え合う、という言葉から連想するのは米軍の弾圧と戦う民衆と、その民衆のリーダー瀬長亀次郎の姿です。たがいに互いを「不屈」と呼び合っていた姿に、信頼と愛情で支え合っていた力強さを見ます。その姿が、なにやらこのヨハネの洗足の場面と重なって見えてしまうのは、ヨハネの共同体もまた、このとき激しい弾圧と迫害にあっていたからです。ヨハネはもしかすると、キリストに従う者が互いに愛し合い仕え合うことが、この厳しく苦しい弾圧を生き抜く糧となると考えたのかも知れません。

私たち教会は、神から遣わされたイエス・キリストに従っていく者たちとして、イエスがなさった通りのことを行っていきたく強く思われます。(国分美生)